

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	てとりキッズ			
○保護者評価実施期間	令和 8年 1月 27日		～	令和 8年 2月 14日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	児童発達支援 3家庭 放課後等デイサービス 22家庭	(回答者数)	児童発達支援 1家庭 放課後等デイサービス 13家庭
○従業者評価実施期間	令和 8年 1月 27日		～	令和 8年 2月 14日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	11名	(回答者数)	11名
○事業者向け自己評価表作成日	令和 8年 3月 9日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	隣接する「てとり」や「てとりPlus」と交流の機会を設け、近隣の公園で活動を行う。事業所内で形成が難しい30名程度の集団の中で、協力を必要とする集団設定遊びや相談場面を作り、役割を担うことや集団帰属意識を高める等、社会性を深めていくことができる環境が本事業所の強みとなっている。	事業所内だけではなく、他事業所の利用児と交流する機会の中で、日常的に馴染みのある人的環境に限定せず、遊びを通して他者と関係を広めていけるように集団活動を設定している。共同体験を通じて関わりのきっかけを作ることや、「嬉しい」「悔しい」等の共感場面が生まれ、次回の意欲に繋げることができる関わりを心がけている。	戸外活動時に系列の事業所のみで活動するだけではなく、遊びに興味を示す近隣の児童を受け入れ、社会的な交流場面としていく。児童だけではなく、近隣住人など地域とのつながりを大切にし、社会規範へ理解を深めたりコミュニケーション能力を養い、将来的な自立や社会参加への促進としていく。
2	活動プログラムの一環として、利用児を主体として設定された時間内のスケジュールの組み立てを行う機会を設けている。話し合いの場面では、職員の介入を必要最低限にして、司会や書記等の役割や各々が意見を交わすことができる場を設け、児童が主体的に活動の選択ができる環境としている。	利用児の意欲や主体性を尊重し、実年齢や特性によって『できない』ことを作らず、職員が個別で対応し理解を促すことや、必要事項を記録し文字化したり手順書を用意し、情報を可視化する等、ツールを用いて再現性を高められる構造化を図っている。	活動や設定遊びの話し合いの場が多く設けられているため、利用児の要望や主体性をいかすことができるように、十分な時間を確保しスケジュールの組み立てを行う機会を設けていく。自己選択の幅を広げることができる環境や、安心をもって自己主張することができる雰囲気作りを努めていく。
3	心理指導担当職員による個別の専門的支援を実施できる環境があり、支援が必要な児童や保護者のニーズに合わせて対応している。集団活動に入ることによる不安が強い児童が心理指導担当職員との関わりを通して、安心を置き集団生活への適応を図ることができるように努めている。	専門支援を必要とする利用児の心理状況にあわせて、活動の選択ができるように十分な職員配置としている。個別支援を活かしていくために、個別対応時の共有を図っている。また、教育機関への登校が難しくなっている際は、施設への通所を受け入れ、家庭や教育機関と連携を取りながら支援につなげている。	通所時だけではなく、保育所や教育機関等の事業所外での様子を知ることが事業所内での支援に活かせるため、利用児や保護者のニーズに合わせて、系列の事業所と連携し保育所等訪問支援を検討・提案し、多面的な支援を可能にしていく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	学習やボードゲームなど同じフロアを共有して使うため、パーティションや机を用いて空間を隔てることは可能となっているが、活動により室内での運動や体を動かす十分なスペースの確保が難しい場合がある。	天候により戸外での活動が難しくなってしまうため、設定する集団活動時に室内に広い空間を作り全員で運動遊びなどを行うことも可能となるが、余暇時間はそれぞれが希望する活動があるため、活動の規模や使うことができる空間が限定されてしまう。	十分な活動スペースを確保するために、二階フロアの開放を検討していく。開放する場合は、職員の配置や事前にルールを提示し、活動に適した空間となるようにする必要がある。
2	継続して通所を希望してくれている利用児が多く、年齢の幅が広がり設定活動に偏りが出ることがある。上述しているように、利用児が主体となってスケジュールリングをする機会を設けているが、興味関心が向かず活動に消極的になってしまう利用児もいる。	その日の利用児の年齢層により、好まれる遊びが変わり少数派の意見を聞き入れることが難しい場合がある。活動への興味関心の低さだけでなく、活動内容に対する羞恥心が芽生える利用児もいるため、人的環境を踏まえた設定活動の思案が必要となる。	実年齢に応じた配慮をする。活動に羞恥心を感じる利用児には、審判や補助役として遊びへの参加は促さず、役割を任せることで活動への参加を促している。活動内容への関心だけではなく、集団・小集団の中で共感性を育みながら、次回に期待できる活動の提供と環境作りが職員に求められる。
3			